

体験取材とキャンペーン

2015年7月16日

生井久美子（いくい・くみこ）

朝日新聞社・記事審査室幹事

■これまでの歩み■

1956年 京都市出身。上智大学文学部心理学科卒。

1981年 朝日新聞入社・仙台支局（警察、市政、高校野球、選挙など2年半）。

1983年 政治部（首相官邸、自民党、野党、厚生省、法務省・検察、環境庁、外務省など担当、6年半）。

1990年 学芸部（現在の文化くらし報道部）、企画報道、くらしのあした班、地域報道、生活部などで、医療・介護・福祉など、「いのち」の現場を取材。

2006年～2011年 ニッポン人脈記班「ありのまま生きて」など連載。

2012年4月～現在、記事審査室幹事

（2013年5月～12月 特別報道部・プロメテウスの罫取材班）

■1■乳がん経験者との出会い→キャンペーンの出発、1990年

・連載「この『選択』乳がん」からシリーズに（90年9月～97年）

①「麻酔から覚めたら 乳房が切られていた」女性との出会い

②「失敗例は聞かされず 背の筋肉で乳房作る」…

・キーワードは「インフォームド・コンセント（IC）」。90年はIC元年。

訳「説明と同意」は、本来の意味とは違う。

→連載紙面「医師に十分説明された上で患者が治療法などに同意・選択する」

・どう取材するか。

④「日本は後進国」「スキャンダルだ」という医師。

・「どんな理屈っぽい女も、おっぱいを取ったら泣き寝入りする」

・ICを歴史的、構造的に考える→きっかけはナチスの人体実験…

・医療の専門記者ではない。素朴な疑問。なぜ？の大切さ。

・経験者の会、特に「ソレイユ」「イデアフォー」の活動。転機→7回連載。

・何を伝えるのか。届きたいのか。

◆投書や声が200通に

(「1通の背後に200通」とデスク。まだメールの普及しない時代。)

- ・厚い手紙の束。無念、理不尽さへの思い、気づき、共感や励ましも。
- ・「ひとりではない」**実感**。読者に支えられ、励まされる。そして「覚悟」も。
→「投書」編3回、「医師との対話」編3回、「アメリカから」編5回

◆ICは医療だけではない

- ・情報や権力を持つ側と持たない側が、対等に向き合う手立て。患者と医師、生徒と先生、女性と男性、国民と政治家…。
- ・投書編の最後→「木村利人教授は、10年前、ICの重要性を全国32カ所の講演会で医師らに語った。そのとき、多くの医師に『日本には全く関係ない。火星人が宇宙のかなたで話しているようだ』といわれた。その日本医師会が取り組む姿勢を見せた。木村教授は語っていた。『あるべき未来を語り続ければ、社会は変わる』。取材をする中で、私も、そう思った。」

◆言葉との出会い、気づいたこと

- ・「権利」って何？ ・「人権」というと…
- ・「善魔」 ・「告知」という言葉への違和感
- ・QOLは「人生の質」→治療法の選択は人生の選択。
- ・手術台の現実 →いくつものことに気づかせ、扉を開いてくれた。

★乳房温存か全切除か／放射線使わず無作為比較試験の衝撃・92年1月11日2社面

- ・私が変わる。医療を変える。医療から社会を変えてゆく。乳がんは鮮やかな例だった。直接話を聞いた乳がんの患者さん40人、手紙をもらったり電話で話したりした人が200人、医師は乳がんの専門医20人を含めて30人以上、患者さんの家族や看護婦さんを加えると、のべ270人を越える。

→本にして届けよう！→「私の乳房を取らないで 患者が変わる乳ガン治療」(三省堂)

■2■連載「付き添って」シリーズ→介護のキャンペーンに(94年～)

- ・「付き添いさん」って、どんな仕事？ 付き添い制度廃止の前に、取材したい。

■取材って何？ 体験取材って何？

- ・現場へ。許されるならば、できる限りのことをしたい。
- ・体験取材もそのひとつ。
- ・頭でなく、全存在・全細胞で感じたい。

→支局時代、デスクの言葉「現場へ」「100聞いて、1書け」

- ・「付き添って・ルポ老人介護の24時間」（10回、94年6月1日～18日）
- ・①地獄は死ぬ前にもあるのね
- ・②言葉が戻った
- ・③私を縛らないで

→自分も縛ってもらおう。チューブも入れてもらおう。

◆連載に600通の反響・さらに増える→キャンペーンに育ってゆく

- ・「付き添って・2部「私たちの体験」（13回）→この国の正体
- ・「付き添って・3部「高齢先輩国から」（16回）
- ・「介護の場から」シリーズ→ワッペン方式 95年～97年
- ・連載「付き添い廃止の現実」5回／「新しい風」6回
- ・連載「チューブはやめて」3回+反響編／「付き添いが消えた？」5回（97年）。

◆「縛らない」介護・看護をめざして→なぜ「縛る」にこだわるのか

- ・人が縛られている衝撃→「ねえちゃん、このひもほどいて」
- ・縛られているのはだれか。
- ・縛られるとどんな気持ちができるのか→再び、縛られてみる。体験の意味。
- ・「縛る」を定義してみよう→どうしたらやめられるか。
- ・試される介護保険、精神科病棟でも。在宅でも抑制服。
- ・縛られているのはだれか。私も、だと気づく。（介護現場だけではない）

■取材とは、人と出会うこと、そして自分と出会うこと

「ここで、パンツ脱げまっか？」

- ・心に残る言葉→「質問なんかするからだめなんだよ」

◆キャンペーンって何だろう？

- ・驚きから始まる。テーマとは「出会う」もの。
- ・読者とともに考えたい（その後の精神障害、認知症報道も）。
- ・だれの、何のために？（認知症の当事者、精神障害、知的障害、被災地から）
- ・いま、思うこと。
- ・そして、これから→だれも片隅に追いやらない、だれの人生も奪わない社会に。
- ・成功の秘訣は？

たくさんのお会いに感謝して。完

■資料：企画した主な新聞連載・キャンペーンなど■（特筆なければ生活面）

- ・「インフォームド・コンセント／病を知る 知らせる」（3回、90年5月）
- ・「この『選択』乳がん」（7回、90年9月3日～12日）
- ・「この『選択』投書から」（3回、同10月8日～11日）
- ・「この『選択』 医師との対話」（3回、同12月18日～20日）
- ・「この選択「アメリカから」（5回、91年5月20日～25日）。

→「この決断 「乳がん」 3回+反響編（97年12月9日～）

★特報 早期乳がん治療法／乳房温存か全切除か／放射線使わず無作為比較試験／全国規模「研究成果無視」と指摘」（2社面 92年1月11日）

- ・「がんと向き合う」 7回+「反響編」 4回、（93年10月13日～11日16日）

介護関連

- ・「ルポ老いの細道・長期介護のいま」（4回、94年3月9日夕刊3面～）
- ・「付き添って・ルポ老人介護の24時間」（10回、94年6月1日～18日）
- ・コラム私の見方「これが豊かな国の介護か」94年7月14日オピニオン面
- ・「付き添って・2部「私たちの体験」（13回、94年7月13日～8月3日）
- ・「付き添って・3部「高齢先輩国から」（16回、94年12月6日～31日）
- ・（95年阪神大震災）
- ・「介護の場から」シリーズ→ワッペン方式 95年～97年
- ・「付き添い廃止の現実」（5回、95年11月28日～12月2日）
- ・「新しい風」（男の介護／GHよりあい／ヘルパーから政治家になど6回）
- ・「チューブはやめて」 3回+反響編（97年7月8日～）
- ・「付き添いが消えた？」 5回、97年10月15日～17日）

・「政治家よ」1面シリーズ「悩む米国」・連載「政治を教える・米国の学校現場から」政治力を学ぶ（上下98年）

・調査研究「人間らしい死をもとめて求めて ホスピス・『安楽死』・在宅死」98年1月～8月、岩波書店で単行本化99年）

「介護保険 足もとから」（4回、99年2月2日～2月5日）

「縛らない」介護シリーズ

- ・介護の貧困象徴・見直し機運／痴呆性高齢者の拘束（99年3月8日オピニオン面）
- ・縛らぬ介護、手探り（5月3日、特設面）
- ・模索続く、ドイツの介護「スキャンダル」（6月13日オピニオン面）
- ・ひと／「縛らない看護めざす」田中とも江さん（00年3月7日2面）
- ・一からわかる「縛らない」介護（00年3月11日オピニオン面）

- ・縛らない介護「人間らしく」（00年6月28日、オピニオン面）
- ・（2000年 介護保険スタート）関連報道・連載など

精神障害関係

- ・貧しい医療の質・精神病床にも多い社会的入院（01年1月、オピニオン面）
- ★特報・診療報酬高い静脈栄養、不必要に繰り返す／埼玉・朝倉病院（1面、00年12月26日）
- ・精神病院「社会的入院」3割／25年／あなたの隣で（01年1月14日、2面3面）
- ★特報・看護婦は覚えていた 埼玉・朝倉病院の「黄色い点滴」（1社、01年1月18日）
- ・生活保護を悪用 精神病院とも告げず、患者を拘束 朝倉病院（01年2月1日）
- ・心細さや葛藤…制度不備も映し 家族が精神疾患に お便り続々（01年3月1日）
- ・「痴ほう難民」精神病院に 在宅も無理、施設も足りず（時時刻刻）（01年2月26日）
- ・精神障害 あなたはその時…（01年3月15日）
- ・岐路に立つ「精神医療」・座談会 上下（01年6月27、28日）
- ・連載「人のなか街のなか」／精神病院に40年以上入院 姉の心に消えぬ後悔」（3回、02年6月4日～）
- ・連載「弱さを絆に」べてるの家から／言葉と自分取り戻す・幻聴も笑って話せる場（3回、02年8月27日から）

知的障害関連・脱施設キャンペーン

- ★特報 知的障害者「脱施設へ」／生活の足場地域に／宮城事業団宣言（1面、02年1月23日朝刊、3面解説「3割入所生活 日本は「特異」」）
- ・新障害者基本計画決まる／地域で『普通の生活を』（02年12月25日）
- ・脱施設へワッペン（7回、03年5月21日～03年10月16日）
- 「青森県平舘村『かもめ苑』／障害者都内に受け皿なく」「再出発 ルポ長野の『西駒郷』上下」、「コロニー雲仙の25年・上下」
- ・宮城・船形コロニー、解体宣言から1年余／50年ぶりの「自宅」へ（04年2月11日）
- ★特報 脱施設 宮城全県で 浅野知事解体宣言（1面、04年2月20日朝刊）
- ★特報 知的障害の7000人 刑務所に（06年6月5日3面）
- ・障害者自立支援法関係
- ・支援費関係

認知症の当事者報道

- ・「私はアルツハイマーです／語り始めた人たち」上下+反響編（04年8月）
- ・「クリスティーンの日々／アルツハイマー国際会議を前に」上下（同10月）

- ・国際アルツハイマー病協会・京都会議（同11月）
 - ・ことばの旅人夕刊be1面「人生は恐れを知らぬ冒険か無か」（05年1月）
 - ・認知症トリオで講座「当事者・医師・作業療法士」（05年11月18日）
 - ・太田正博さん「ひと」欄に。（05年12月9日2面）
- ・福島智・東大助教授に聞く／障害者福祉 改革の岐路／自立支援法案の課題（05年4月19日、オピニオン面）

夕刊1面企画「ニッポン人脈記シリーズ」

- ・「ありのまま 生きて」12回・障害とともに生きる当事者たち（07年4月）
- ・「みんな その日まで」13回・最期まで生き、ケアする人々を（08年3月）
- ・「Dr. コトーを探して」11回・離島の医師や看護師と人々の交流を（11年3月）

「プロメテウスの罠／残ったホーム」（21回、13年12月） 全村避難が続く福島県飯舘村に唯一残った特養ホーム「いいたてホーム」の日々を伝える

<著書>

- ・『私の乳房を取らないで一患者が変える乳ガン治療』（三省堂、93年）
- ・『付き添ってールポ老人介護の24時間』（朝日新聞社、96年、00年、文庫に）
- ・『介護の現場で何が起きているのか』（朝日新聞社、00年）
- ・『人間らしい死をもとめてーホスピス・「安楽死」・在宅死』（岩波書店、99年）
- ・『ゆびさきの宇宙 福島智・盲ろうを生きて』（岩波書店、09年単行本、15年岩波現代文庫に）

<共著>

- 『新聞記者の仕事』（対談。岩波書店、97年）
- 『死刑執行』（朝日新聞社、93年）
- 『政治家よ 不信を越える道はある』（朝日新聞社、00年）
- 『私の体のまま抱いて』（人脈記「ありのまま生きて」。朝日新聞社08年）
- 『プロメテウスの罠 7』（連載「残ったホーム」。学研、14年）など

<受賞>

- 95年、家庭面連載「付き添って」シリーズでアップジョン医学記事賞
- 11年、ニッポン人脈記「Dr. コトーを探して」でファイザー医学記事大賞